

<巻頭言>

ダムと景観

山内 彪*



近年、国民のレクリエーションやリゾートへのニーズが高まるにつれ、その対象としてダムやダム湖が改めて注目されてきている。周囲の景色とマッチしたダムやダム湖のたたずまいに格別の美くしさを感じるのは決してダム屋だけではあるまい。

土木の世界にあまり縁のない方々でも“土木構造物のうちで代表的な物は？”と聞けば橋梁やダムを挙げる人は結構多いのではなかろうか。幾多の困難を克服しながら巨大なダムや長大な橋梁の施工に挑む姿は、それなりに男のロマンをかきたてる何かがある筈で、それ故に小説や映画の題材にもなり易いということになる。土木を志した動機の一つとして、こういった映画を観たり本を読んだりしたことをあげる人も案外多いのではないか。

ただダム屋としてのひがみかも知れないが、一般の人々にとって、この橋梁とダムに対する感じ方というか見方というか、どうも若干の差異があるようだ。

最近、大学での土木志望の女子学生が増えてきていると聞く。彼女らの将来の仕事の希望についてのアンケートの結果を何かで読んだが、その中で橋梁の設計をやってみたいというのはあったが、残念ながらダム設計というのはなかったような気がする。橋梁というものにはダムと較べてやはり何かスマートさといったものが感じられるのかも知れない。

橋を架ける話が持ち上がった場合、その採算性を論じたり、土地所有者や漁業関係者等の一部から反対の意見は出ることはあるものの架橋そのものに対する極端な反対運動につながるケースは少ないような気がする。これに対してダムの場合は、水没者の方々の反対運動のみならず、下流の人々、さらにはおよそダムに関係のない人々まで巻き込んで、ダムはあたかも自然環境破壊の元凶だとでも言わんばかりの環境論者の反発もあり、相当大規模な反対運動につながる場合もある。

橋とは、これまで往来できなかった所と所を結ぶということでそれ自体が関係する人々にとっては夢である。勿論、施工中の各種の困難も多く、それはそれなりにドラマではあるが、一般の人にとってはむしろそのことより出来あがった橋の姿の方が頭に描かれる。また完成すれば、日々その利用を通じて橋が身近なものとなり、橋そのものの姿が美しいとか周囲の景色にマッチしているとかを肌を感じる事となる。それだけに橋の設計者自身も必然的に設計にあたってはその色彩、タイプを含めて芸術的な配慮をしており、その点はむしろ建築物に近いという感じさえする場合がある。このことが橋梁そのものに何となくスマートさを与えており、時には反対論すら抑えてしまう要素の一つにもなることがあるのではなかろうか。

これに対してダムのイメージはどうであろうか。良く言えば自然に敢然と立ち向う男の姿であるが、悪く言えば河川を切断して自然の環境を破壊するデストロイヤーとでも言われかねないのである。ダム

* 建設省河川局開発課長（現在建設省四国地方建設局長）

は設置する場所と受益する人々が住む場所が離れており、しかも設置する場所の人々は水没という形でかなりの土地を失うのであるから犠牲という感じが非常に強い。さらに出来あがったダムを見る周辺の人々にとってダムの効果を身近に考えることは少なく、むしろダム工事の最盛期のにぎやかさを見た人にとっては、ひっそりと静まりかえった“兵どもの夢の跡”といった感じがするのではなからうか。そのためでもなからうが、美しいダムやダム湖が素晴らしい景観として注目されることは少なく、むしろ濁水だとか堆砂だとかそのマイナス面だけが強調され、さらに進んでダムは本来的に自然環境を悪化させるものだといったような誤解を招く声に変えられている。

一般に人々の目をなごませてくれる美しい景観をもつものとして湖や池があげられる。しかし考えてみるとこれらの湖や池の多くも元はと言えば自然の様々な突発的活動によって生じたものである。火山の噴火口の場合もあれば、その溶岩によって河がせきとめられたり、土石流や地震でせきとめられた場合もある。近年においても会津の五色沼や上高地の大正池などがその例である。これらの池や湖も出来た当初を見れば自然の力によって破壊変形された姿そのものであったであろうが、時とともに自ずと周囲の風景にあった姿に落ち着いたものである。ダムやダム湖でもある程度時が経つと、何となく周囲にマッチした姿になるものである。ただダムの場合は完成後人工的な水位変動があるため、一部の地表面がむき出しになるなどの現象があるが、これらも環境上の解決が決してできない訳ではない。

一昨年から建設省と林野庁の共催で「森と湖に親しむ旬間」を毎年七月末に実施することになっている。その行事の一環として昨年は森と湖（ダム湖）の入った写真コンクール、今年はその風景画コンクールを実施してきた。今年の風景画は全国から1,100余の応募があったが何れもダムやダム湖が美しく描かれており、審査員の先生方もダムやダム湖が画材として立派に成り立つことがよく判ったというような講評を述べられていた。

アーチダムのあの線型の優しさ、重力式ダムの重厚さなどそれ自体が美しい景観をかもし出しているダムも多い。一方、どうもその機能だけを追求しているような構造物になっているのではないかと思われるダムもないではない。ダム本体の姿や形だけではなく、その上にある放流設備の形状や色彩、ダム天端の高欄をはじめとする各種の附属施設、管理用建物の色やデザイン、そしてこれら相互の間の配置やバランス等でもう少し工夫をすればもっと美しい景観が生み出されるのではないかと思われるような場合もある。

こうした視点でみると、我々ダム屋はダムを設計する場合、個々の施設に対する美意識は当然持っているが、ダムやダム湖全体を一つの景観として、設計当初から考えて進めているかどうかについては若干の疑問も残る。

最近ではダム湖に長大橋梁が計画される事例も多くなっている。これらも含めて全体の景観を念頭におきながらダムの全体設計を進めて行くことを考えても良いのではないか。このことによりダムの全体事業費が若干割高になったとしても地域に貢献するダムをつくるという点からすればある程度やむを得ない気もする。ダムは決して自然を破壊するものではなく、新しい自然環境を創造するものだという観点からも“ダム景観学”とでも言うべき分野の研究発展を提唱してもよい時代が来ているのではないかと思う。